

エンドウ栽培農家の経営実態

松 元 幸 男

(鹿児島県農業試験場)

MATSUMOTO, S.

Case Study on the Advanced Farm raising Green Peas.

エンドウ類は本県輸送野菜の最重点品目となっているが、産地での1戸当り栽培面積は10aにみえないものが大部分であるし、気象やその他の災害による年次豊凶差が大きいことから、年ごとに栽培面積が変動し個別経営の不安定、大量生産、継続出荷の大きな支障となっている。しかし農家の一部では、1戸で30～50aに固定した栽培面積をもち高い収益をあげ基幹作物として位置づけられている。この調査ではキヌサヤエンドウの主産地である内之浦町において、栽培面積が大きく定面積を維持している農家2戸を選定し経営構造全般についてのききとり調査を実施し、今後産地の拡大と安定化をはかるための資料としたが、ここでは一事例（A農家）について述べる。

1. A農家の経営概要

A農家の経営は、第1表に示すように水田160a畑30aを所有する専業農家で当地域の1戸当り経営面積を大きく上廻っている。キヌサヤエンドウの栽培は昭和45年から始められ、昭和47年度（調査年度）の和牛部門をのぞいた現金所得は約160万円となっており、その内キヌ

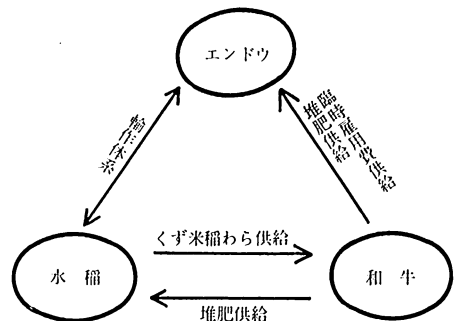
第1表 A農家の経営概況

経営類型	水稻+キヌサヤエンドウ+和牛		
経営型態	水田 畑	160a 30a	190a
労働力	基幹 補助 臨時	2人 4人 のべ140人	補助は両親 と姉妹2人 (賃労者)
作物作付	早期水稻 二期水稻 キヌサヤエンドウ	160a 130a 30a	320a
家畜	和牛	生産 肥育	3頭 3頭

サヤエンドウは6割を占め、所得の面で重要な地位を占めている。

2. 労働配分と雇用対策

水稻（早期、二期水稻）、和牛、エンドウ部門の組合せにより年間労働配分は調整されてはいるが、エンドウ30aの年間総労働時間は3,340時間と多労を要し、和牛飼育労働を除く全労働の61.2%を占めている。また、エンドウの労働時間のうち約8割は収穫調整作業に費され、12月以降4月までの4ヵ月余りの期間に集中している一方、8月には早期水稻の刈取、脱穀と二期水稻田植作業の競合がみられ、合せてこの5ヵ月間に臨時雇用も集中している。とくにエンドウ収穫時の雇用労働不足に対しては、慰安旅行への案内、エンドウ栽培適地の無償貸与などによる雇用確保対策がとられている。



第1図 各部門の関係図

3. 水稻、和牛、エンドウ部門の結合関係

経営の主要三部門は第1図のように、①和牛（若令肥育）の計画的出荷によるエンドウ収穫時の臨時雇用費捻出、②和牛飼育による堆肥肥投入で水田地力の維持増進、③水稻副産物（糶わら、くず米など）の和牛部門への供給、などの合理的結合関係がみられる。なお、二期水稻は8月の早期水稻との労働競合を考慮して栽培面積を縮小する予定である。